

## 藤森朋夫君の思い出

石 井 庄 司

藤森君についての思い出で、もっとも古く、また、印象の深いのは、大正十二年の四月上旬に約十日、三人で九州の各地をめぐるものである。観光でも、研究でもなく、毎日一、二カ所の小学校、または中等学校でお話をして歩いた。堂々たる体格の藤森君が、子どもを相手にやさしく話をし、よく聞かせていたことが、今もなお記憶に新たである。

大分市では、岩田九郎先生のお宅で数日もとめて頂き、当時、岩田学園に勤務の小野直氏に案内してもらって、あちらこちらへ出かけた。豊後の竹田へは、まだ国鉄の通じていないときで、あやしげな車で危い山坂を越えて行った。信州生まれの藤森君も驚いて心配していたことが思い出された。

耶馬溪で羅漢寺へ行く男坂をゴシテイ、ゴシテイと信州ことばで元気に登って行った藤森君の声音など、今もありありと耳に残っている。

大正十四年の春、わたしが京都へ行ったあとの附属中学の後任には、その年卒業の藤森君が就任したので、その後、共通の教え子についての消息を時々知らせてくれた。

その翌年の春、藤森君も、京都へ来るのではないかと思っていたが、都合で仙台へ赴いた。その後、一、二年してからであったが、山田孝雄先生のお仕事として、藤森君から頼まれて、京都博物館にあった『大原千句』の校合をしたことがあった。

昭和四年の春、藤森君は、東北大学を卒業して上京、上野公園の根岸寄りのさる寺院に下宿していた。わたしは、少しおくれて、その年の九月に入京して、藤森君を、その寺院に訪ねたことをおぼえている。

翌五年の春休みに、わたしは風邪で床に就いていたが、藤森君が訪ねて来てくれて、臥床のまゝ、いろいろと話し

込んだ。そして、同好のものが集って、何か研究会を開いたらどうだろうかということになった。それは、京都にいたころ、月一回、数人のものが沢瀉久孝先生のお宅に集って、当番で万葉についての発表を行ない、あといろいろと話し合っていた。その楽しかった会合から離れてきたことがさびしく、ぜひ東京でも、そういう会があったらと思いい、その場で、万葉を卒論にした森本治吉、中島光風、佐伯梅友、五味保義という諸君の名が出て、呼びかけてみようということになり、その年の五月の第三水曜の夜、一ツ橋の学士会館に集ったのが、万葉三水会というわけ。けっきょく、はじめから藤森君が世話役という形で出発してしまった。

一年ほどして、会の事業として、『万葉集研究年報』を出すことになったときも、なんとということなく、藤森君の世話で、岩波書店から出版してもらうことになった。もつとも、藤森君から「ぜひ頭を下げに行ってくれ」といわれて、君の案内で、岩波書店の堤氏のところへ出向いた。わたしは、ほんとうに頭を一つ下げただけであったが、万事よくやって下さった。おそらく売れ行きも、よくはなかったと思われるが、毎年刊行して下さい、印税も頂戴していた。これは、すべて藤森君が預っていて、毎月の学士会館の会場費その他にあてられていた。

こういうことを書いていると、きりがなが、藤森君は、長い間、実によく世話をしてくれたと思う。『年報』の原稿分担など、会員各自の割り当て表を作製して、実に熱心に督促してくれた。一ばんやっかいな索引は、いつも藤森君の分担で、多数のカード整理で、ご家庭においても、さだめしご迷惑なことであつたらうと、恐縮に思うしだいである。

戦後になって、万葉三水会も少し地方の方がたともになり、これも藤森君の主張であつたと思うが、静岡と奈良で二回、地元のご後援を得て開催した。

とくに、奈良でのときは、藤森君の東京女子大学の研究旅行のあとで、佐伯さんにも思い出の深い、日吉館で三人一室にとめてもらったことなど、なつかしい限りである。

第三回は、愛媛大学のお世話になったが、そのときは、もう藤森君の健康が許さず、参加できなかったのは、お気の毒であった。そして、地方での会も、それぎり行なわれないできている。

藤森君の大和旅行は、斎藤茂吉先生の藤原御井の調査のお伴をして、幾度も行ったよううで、そのときの模様をいろ

いろと話してくれ、わたしをして羨望の念にからしめたことが、しばしばであった。

東京女子大学の学生をつれての万葉旅行は、毎年行なっていて、大和の各地を廻っていた。わたしは、生国の大和のことであるが、もう藤森君には、かなわぬという気がした。そんな気もちから、浄瑠璃寺から岩船寺へ行く山路のことを話したところ、藤森君は、さっそく、そのコースをとり、女子大の学生と柿の木に登って柿もぎをしたことなど、便りにくれたことがあった。

旅行の話となると、あの大きな眼をいとは輝かせて、話は尽きなかったが、藤森君も、いまは「何所行良武」と思うと、とみに眼頭の熱くなるのをおぼえる。

昨夜も、佐伯さんとふたりで、藤森君と共同の仕事の再検討のあと、しみじみと思ひ出に耽ったことであった。藤森君の霊のいよいよ平安ならんことを祈って、筆をおく。

(昭和四五年三月二四日)